

# 本はともだち

リレー読書日記

かとう よつこ ●東京大学大学院博士課程  
修了(国史学)。現在、東京大学大学院人文  
社会科学系研究科助教授。著書に「機軸する  
1930年代」戦争の日本近現代史など

## 加藤陽子 「過ち」を直視する勇気が 真の「歴史の教訓」を導きだす

永田町の大臣や国会議員、霞が関の官僚は、何も本誌にスクープのネタを提供してくれない。日々の重要な政策決定を行うために存在している。彼らは政策を立案し決定する際、未来よりも過去を見て行動しているのではないかと、私には思われる。ひとは自らが犯したかつての「過ち」を、自らがその後理解した形を避けようとするからだ。ワシントンで取材を続ける共同通信社記者による名著、久江雅彦『9・11と日本外交』(講談社現代新書、693円)が実によく描いているが、イラク戦争で示された日本の積極姿勢は、湾岸戦争の「過ち」を徹頭徹尾避ける、というその一点から選択されたものだった。「過ち」とは、多国籍

軍に130億ドル支援しながら、「血も汗も流さない日本」と非難されたあの一件である。未来への政策決定にあたるべき人々が、いかに過去の歴史が教えたり予告したりしているの自ら信じているもの縛られるか。こうした例については、アーネスト・メイ「歴史の教訓」(岩波現代文庫)が詳しい。第二次大戦において、ローズヴェルト大統領が「無条件降伏」に固執したのは、第一次大戦において、ウイリソン大統領が犯した「十四カ条」の過ちを二度と繰り返



返さないためだった。だが、その無条件降伏路線が、合理的選択でなかったことは、今や、さまざまな研究で明らかにされている。ローズヴェルトはウイリソンの亡霊に見事囚われてしまったのである。過去の歴史に学ぶことは、それ自体まったく正しい。だが問題は、為政者が「通常歴史を誤用する」という点にある(永田町の先生方、失礼。メイ教授が言っていることです)。為政者が、歴史をふりかえって先例を求めるとき、自らがまず思いついた事例に囚われ、狭い類推例の中から恣意的に歴史を使いがちになる。外交史家でありながら、統合参謀本部歴史課での勤務経験があるメイ教授が『歴史の教訓』を書いたのも、為政者はそのつもりになれ

## 公文書館の諸問題

こうしたことを長々と書いてきたのは、わが国の公文書館制度の危機が顕在化したからだ。もともと戦後の重要な公文書さえ十分に収蔵していなかった国立公文書館が、01年の情報公開法、独立行政法人化により、危機的な状況に陥った。それまでは省庁から公文書館に一年間に平均1万7000冊余りの公文書が移管されていたが、同法施行後、驚くべきこと、674冊にまで激減してしまった。

私も参加したこの懇談会は今年6月、検討結果を報告書にまとめ、その内容は内閣府のホームページ上で読める。問題を打開するため、考えられる限りの方策を掲げてあるが、国家存立の基本的な機能を担保するものとして、国立公文書館を位置づけようとする自覚が、これまで日本になかったのが一番の問題なのだろう。

これはどうしたことなのか。福田康夫内閣官房長官(当時)はこの問題を深刻なものとして捉えて、「公文書等の適切な管理、保存及び利用に関する懇談会」(座長、高山正也、慶應大学教授)を設けた。見識のある判断だと思ふ。不当

私も韓国、中国の公文書館の現状を駆け足で調査したが、公文書館の職員数だけでも韓国130人、中国560人で、日本42人とは桁違いに体制が整っていた。東アジアの史料状況に詳しい北大大学院法学研究科の川島真助教授によれば、東アジアの国際間の折衝において、今後は完全にして十分なアーカイブズを持つ国がヘゲモニーを行使する時代になるという。公文書館制度の改革は、比較的軽微な予算で日本の国家戦略の基本軸を変えうるものとなるのだから、是非とも実現して欲しい課題だ。

「過ち」とは、多国籍



日本が、なぜ太平洋戦争期にダメになったのか、というものがあ。私は、日露戦争の教訓が海軍の秘密主義によって、正しく後世に伝わらなかつたこと自体に問題があつたと考えている。

野村實『日本海海戦の真実』(講談社現代新書)が衝撃的に暴いたように、海軍は公刊された『明治三十七八年海戦史』4冊の他に、極秘の147冊に上る『海戦史』を編纂していた。この極秘版は海軍の戦術教官でも容易に見られるものではなかつたという。著者の田中が強調するのは、極秘版『海戦史』の記述からは、後の大艦巨砲主義は到底導きだせないとの点である。敵前大回頭後、30分間だけの砲撃でバルチック艦隊が潰滅したというのは、現実の歴史の経過を無視した虚妄であつ

田中宏巨『秋山真之』(吉川弘文館、1995円)は、日本海海戦でバルチック艦隊



## 隠蔽は不毛を生む

実があるという。しかし著者は、二十一条要求時の軍務局長時代の秋山、晩年の大本教信仰まで淡々と描く。

を破った東郷平八郎の指揮を支えた作戦参謀秋山真之の全生涯を豊かに綴った著者渾身の伝記である。

文人と武人を多く輩出した四国松山の産、秋山の伝記を綴る夜は、銀杏を香ばしく炒めて塩をふりかけたものと、歯にしみとおる秋の酒をたんと用意したい。この本は日露百年に便乗した秋山万歳の本では全くなく、読む者を深く考えさせる本なので、ついつい酒が進んでしまうのだ。

明治期に活躍した軍人の場合、日露戦争後について描くだけで、その人物を絶対視する人々からお叱りを受ける現

ところが大正期になると、秋山兵学や日露戦争の教訓は、後世に正しく伝えられなくなってしまう。床屋談義でよくなされる歴史問答に、日露戦争期まで合理的であつた

野村實『日本海海戦の真実』(講談社現代新書)が衝撃的に暴いたように、海軍は公刊された『明治三十七八年海戦史』4冊の他に、極秘の147冊に上る『海戦史』を編纂していた。この極秘版は海軍の戦術教官でも容易に見られるものではなかつたという。著者の田中が強調するのは、極秘版『海戦史』の記述からは、後の大艦巨砲主義は到底導きだせないとの点である。敵前大回頭後、30分間だけの砲撃でバルチック艦隊が潰滅したというのは、現実の歴史の経過を無視した虚妄であつ



## 戦中派 動乱日記

山田風太郎

た。ここにも歴史を隠すことから生まれた近代日本の荒廃がある。

山田風太郎『戦中派動乱日記』(小学館、2415円)。虫

今アメリカ軍が行っていることは、日中戦争から太平洋戦争にかけて、中国大陸の占領地に日本がしていたことに近い。イラクの現実が過去の歴史の類推例を求めぬなら

ば、それは、占領地に通貨戦争をしかけ、地下資源と流通を支配しようとした帝国日本の姿なのだ。経済支配の実態をわかりやすく書いた小林の分析が光る。